
失った、アールグレイ

イコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失った、アールグレイ

【Nコード】

N0294B

【作者名】

イコ

【あらすじ】

この幸せが、いつまでも続くものだと思っていた。君を失ってから気付いたんだ。何が一番大切だったのかを。

――冷えた空気に身震いし、オレは目を覚ました。

『失った、アールグレイ』

午後1…34。少し遅めの起床だった。

どうやら昨日は窓をあけたまま眠って仕舞ったらしい。
部屋の空気が秋のそれだ。

淡い水色のカーテンが、ゆらりともう一度秋の風と遊んだ。

「…起きる、か」

誰に言うでもなくオレは呟き、ゆっくりとセミダブルの白いベッドから立ち上がった。

一人で使うには大き過ぎるそのベッドが、ギシリときしんで悲鳴をあげた。

——美沙と別れて一週間が過ぎていた。

美沙、木下美沙と初めて出会ったのは、大学のバレーボールサークルでだった。

当時三年生だったオレは、あまりサークルに顔を出さず、授業にもあまり出ないで、ぐうたらな毎日を送っていた。

六月。久しぶりに行ったサークルで、髪の長く、雪のように色の白い女の子が目がいった。

今思えば、一目惚れだったのかも知れない。
それが美沙だった。

オレからの猛アプローチに、美沙は戸惑いながらも答えてくれた。
出会ってから半年、オレ達は付き合う事になった。

「あたし、修の声好きよ」

言いながら彼女は笑った。

彼女は自分の低い鼻と笑ったときに出る片えくぼを嫌っていたが、
オレはそんな彼女が好きだった。

美沙の、全てが好きだった。

——ゴウンゴウンゴウン：

隣の部屋のベランダから、洗濯機を回す音が聞こえる。
カーテンを開けると、秋のやわらかな陽射しにオレは眉をしかめた。
アパートに面する道路からは、無邪気な子供の笑い声が聞こえた。

——どこで間違えて仕舞ったのだろう、オレ達は。

美沙といれば毎日が幸せだった。

なんでもない毎日でさえ、宝物のように感じたのに。

「あたし、大学辞める」

美沙の母親が亡くなって、美沙は大学を辞め、故郷の福島に帰るこ
とになった。

今思えば、きっと美沙のこの言葉が始まりだった。

オレは大学四年になって、就職活動もろくにせず、バイトばかりな
毎日を送っていた。

それでも月に何度か、美沙は福島から夜行バスに乗ってオレの住む
東京まで来てくれた。

その頃だ。二人でこのセミダブルのベッドを買ったのは。

少しして美沙は地元で就職し、こっちに来ることが少なくなってい
った。

オレも美沙に遅れること数カ月、なんとなく決まった会社で働くこ

ととなった。

季節は五月になろうとしていた。

――オレは、冷蔵庫に手をかけた。

中に入っているのは、ミネラルウォーターと腐りかけの牛乳くらいだ。

一人になってから、ろくなものを食べていない。

テーブルの上にはカップラーメンの残骸がいくつか残っている。

美沙は料理が上手かったと、思い出していた。

「別れよう」

それは突然だったのかも知れないし、前から気付いていたことなのかも知れない。

お互い就職し、会うことも連絡を取り合うことも少なくなっていた。

先に切り出したのは、オレの方だった。

「…お互いの為に、別れるのが一番だと思うんだ」

オレがそう言うのと、美沙は悲しそうに笑った。

「…お互いの為なんて、嘘よ。あたしの為なんかじゃない、修は自分の為に言ったんでしょ？」

…最後まで、自分が大事なのね」

そして、彼女は部屋を出て行った。
外では雨が降っていた。

そうだったのかも知れない。

オレは最後まで、一方的に彼女に気持ちを押し付けることしか出来なかった。

美沙の優しさを、オレはすくいあげることが出来なかったんだ。

――オレは、紅茶を飲む為に食器棚に手を伸ばした。
紅茶が好きなオレに、美沙が買ってくれたアールグレイ。
それを口にすることがせめてもの償いだと思った。

二つ並んだペアのマグカップ。

この部屋には想い出が多すぎる。

呼吸さえも、過去を呼び覚ます引き金となる。

――そしてオレはやっと気がついたんだ。
思わず、オレはシンクにうなだれる。

やっぱりオレは、美沙がいなきゃなんにも出来ない。

あんなに大好きだったのに。

あんなに大事にしようと決めたのに。

君がいなきゃ、オレは、

紅茶のありかさえわからないんだ。

e
n
d.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0294b/>

失った、アールグレイ

2010年11月4日13時33分発行